

若田金堀塚遺跡

—若田浄水場ろ過砂置場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017

高崎市教育委員会



1号墳 完成状況（→南）



1号墳出土遺物

序

群馬県は全国でも屈指の古墳県として知られています。なかでも高崎市は突出して古墳の数も多く、市内各所に貴重な古墳が所在しています。近年では、金古町の庚申B号墳や下佐野町の漆山古墳が新たに高崎市指定史跡となりました。これらの史跡を通して、本市が持つ文化財の価値が広く知られることを期待します。

本書は、若田浄水場ろ過砂置場の整備事業に伴う埋蔵文化財発掘の調査報告書です。本遺跡では、付近一帯で多く分布している古墳時代の円墳を中心に調査を実施し、多くの成果をあげることができました。

最後に、本遺跡の発掘調査ならびに報告書作成に多大なるご協力をいただいた地元の皆様、関係機関、各諸氏の方々に厚くお礼申し上げます。本書を通して高崎市の多様な歴史を知る一助となれば幸いと存じます。

平成29年3月

高崎市教育委員会
教育長 飯野眞幸

例　　言

1. 本書は若田浄水場ろ過砂置場の整備事業等に伴い実施した「若田金堀塚遺跡」の発掘調査報告書である。

2. 遺跡番号、所在地、ならびに事業内容・事業主体者は以下のとおりである。

遺跡番号／遺跡名	所在地	事業内容	事業主体者
631　若田金堀塚遺跡	群馬県高崎市若田町字金堀塚291-1 (若田浄水場内)	若田浄水場 ろ過砂置場整備	高崎市 (水道局浄水課)

3. 発掘調査および整理作業は高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課埋蔵文化財担当が行った。調査組織は以下のとおりである。

職名／年度	平成27年度	平成27年度
教育長	飯野 真幸	飯野 真幸
教育部長	上原 正男	上原 正男
文化財保護課長	若狭 徹	若狭 徹
埋蔵文化財担当係長	角田 真也	角田 真也・矢島 浩
庶務担当	加藤 志津代・針井 修	加藤 志津代・金井 英一・針井 修
調査・整理担当	南雲 博文・山本 ジェームズ	南雲 博文・山本 ジェームズ

4. 発掘調査期間は以下のとおりである。

遺跡名	発掘調査期間	整理期間
若田金堀塚遺跡	平成27年10月5日～平成29年3月25日	平成28年4月1日～平成29年3月31日

5. 本書の執筆は山本が行った。

6. 遺構・遺物出土状況の写真撮影は各調査担当者が行った。

7. 図版等の作成、遺物図版掲載用写真撮影は各担当者および担当者の指示の下、補助員が実施した。

8. 発掘調査において、表土掘削および埋め戻し作業は株井ノ上が実施した。

9. 遺構平面測量図の一部および石室立面図の作成、ならびに遺跡の空中写真撮影は株測研に委託した。また、写真図版掲載のオルソ画像は株測研が作成した。

10. 各調査の出土遺物や記録図面、写真類は高崎市教育委員会文化財保護課で保管している。

11. 発掘調査にあたり、地元関係者および関係機関、所管部署にご協力をいただいた。

12. 発掘調査中には、右島和夫氏、深澤敦仁氏に指導を賜った。また、その他多くの方に有益な助言をいただいた。記して感謝する。

13. 発掘調査および整理作業には多くの補助員にご尽力いただいた。記して感謝する。

凡　　例

1. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/50,000地形図（高崎、下室田、前橋、富岡）および1/10,000高崎市都市計画図を元に作成した。
2. 本書中の座標値は平面直角座標第IX系国家座標（世界測地系）を原則としており、方位は同座標北（G.N.）である。
3. 本書中の図版縮尺は、各図に表示している。
4. 断面図に付した標高はT.P.を基準とした。
5. 土層・遺物の色調および土壤の注記は、農水省農林水産技術会事務局および（財）日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1990年版）』を使用した。
6. 遺構には次の略号を使用した。

SF=道路状遺構 SZ=古墳

7. テフラ等火山噴出物には次の略号を使用した。

浅間A軽石：As-A 1783（天明3）年 浅間B軽石：As-B 1108（嘉承3・天仁元）年

浅間C軽石：As-C 3世紀末～4世紀初頭

8. 遺構名称および遺構番号は、原則として調査時に付したものを使用した。

9. 本書中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

自然釉 窯体付着

10. 遺物観察表中の数値は、以下のとおり表記した。

数値のみ：完存値 ()：欠損状態の残存値 【】：復元による推定値

11. 遺物番号は、本書に掲載した遺物に対して連続した番号を付し、本文・遺物観察表・写真図版と一致させた。

12. 参考文献

加部二生1999「横穴式石室の前庭について その起源と系譜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集

小林孝秀2005「上野における横穴式石室葬送儀礼の変化－群集埴の事例を中心として－」『古文化談叢』第52集

神谷佳明1994「律令の土器様相の検討－古代の高环について－」『群馬考古学手帳』4

坂口一・三浦京子1986「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』第24号

中村浩2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

目 次

巻頭写真

序

例言・凡例

目次・図版目次・表目次・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯		第3章 検出した遺構・遺物	
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 調査の方法および調査成果の概要	3
第2節 日誌抄	1	第2節 基本土層	3
		第3節 検出した遺構・遺物	
第2章 地理的・歴史的環境		1. 円墳	5
第1節 地理的環境	1	2. 道路状遺構	17
第2節 歴史的環境	2	3. 小結	18

報告書抄録

図 版 目 次

第1図 若田金堀塚遺跡 周辺遺跡位置図	2	第8図 1号墳出土遺物分布状況図	11
第2図 若田金堀塚遺跡 基本土層柱状図	3	第9図 1号墳出土遺物図(1)	12
第3図 若田金堀塚遺跡 位置図	4	第10図 1号墳出土遺物図(2)	13
第4図 若田金堀塚遺跡 全体図	4	第11図 1号墳出土遺物図(3)	14
第5図 1号墳平面図	6	第12図 1号墳出土遺物図(4)	15
第6図 1号墳断面図	7・8	第13図 1号道路状遺構平面図・断面図	17
第7図 1号墳石室展開図	9	第14図 遺構外出土遺物図	17

表 目 次

第1表 1号墳石室石材計測表	10	第4表 1号墳出土遺物観察表・金属製品	16
第2表 1号墳出土遺物観察表・土器(1)	15	第5表 遺構外出土遺物観察表	16
第3表 1号墳出土遺物観察表・土器(2)	16		

写 真 図 版 目 次

遺構写真	PL. 1～7	遺物写真	PL. 8～10
------	---------	------	----------

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成27年4月に高崎市水道局浄水課（以下、「水道局」）より若田浄水場ろ過砂置場整備事業が計画された。事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、水道局より高崎市教育委員会文化財保護課（以下、「文化財保護課」）に確認調査の依頼があった。また、同年5月27日に水道局より文化財保護法第94条に基づく通知が文化財保護課に提出された。

本事業地の周辺は、剣崎長瀬西古墳をはじめとする既知の古墳が多く隣接する遺跡の密集地である。また、事業に先立ち伐採された樹木の抜根作業に置いて、浅間B輕石の良好な残存状況や古墳石室構築材と想定される大型の礫が検出された。そのため、当該事業地においても遺跡の残存が想定された。

これらのことを受け、水道局と文化財保護課との間で埋蔵文化財保護の協議を行ったが、水道局より事業計画の変更は困難であるとの回答を得た。事業予定地内において検出が予測される古墳時代をはじめとする各種埋蔵文化財への工事による影響は不可避のことであったため、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

第2節 日誌抄

本遺跡の調査地点は高崎市民の飲料水を支える浄水場内であったため、作業には細心の注意を払い実施した。以下、調査日誌より抜粋して作業経過を振り返る。

平成27年

- 10月7日 重機による表土掘削開始。As-Aに覆われる1号道路状遺構を検出。
- 10月9日 調査区北西で大型礫と円形の高まりを検出（1号墳）。
- 10月13日 As-Bが含まれる円形の溝を検出。
- 10月15日 撥乱の礫を除去。須恵器を回収。
- 10月21日 1号墳の調査を開始。表土を除去。
- 10月22日 1号墳石室奥壁と西側壁の一部および裏込めを検出。
- 11月10日 石室内覆土除去完了。片袖の横穴式石室を確認。
- 11月12日 石室開口部南西より須恵器が多く出土。追葬の遺物と推定。

平成28年

- 1月6日 石室前面の精査。前庭構造の検討。
- 1月8日 石室裏込めを精査。
- 1月12日 東側渓門の基底礫を検出。
- 1月18日 30cmの積雪。
- 2月12日 莢石の精査。
- 2月25日 石室内精査。舗石を検出。
- 3月8日 RCヘリによる空中写真撮影。
- 3月10日 1号道路状遺構を調査。礫敷を検出。
- 3月16日 遺構測量。
- 3月17日 1号墳墳丘断ち割り。
- 3月24日 1号墳石室内を土のうで補強し墳丘全体を砂で保護。
- 3月25日 埋め戻し終了。調査完了。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

若田金堀塚遺跡が所在する若田町は、群馬県高崎市の西部、八幡台地上にある。八幡台地は、巨視的には榛名山南東麓に位置しており、およそ50,000年前に室田火碎流により形成された火碎流台地である里見台地と地形的に連続している。また、本遺跡付近の台地上は、谷地により大きく3つに分かれる。そのうち本遺跡は最も北側の平坦地にあり、八幡台地の北側縁辺部に位置している。

なお、遺跡地の標高は現地表面でおよそ149mを測り、台地の北側を南東流する烏川の河岸段丘とは比高差20m以上の高い地形となる。

第2節 歴史的環境

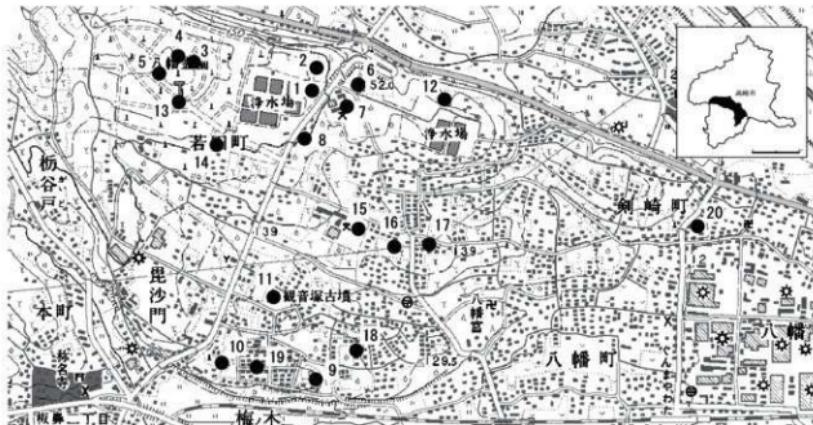
若田金堀塚遺跡（1）が立地する八幡台地周辺には数多くの遺跡が所在する。

縄文時代 若田原遺跡（13）は前期末から中期後半の住居跡を検出しており、大島原遺跡（7）では中期後半の住居跡を確認している。剣崎長瀬西遺跡（12）では草創期土器群の出土があり、縄文時代の活動が当該期まで遡る可能性を示唆している。

弥生時代 本遺跡東に所在する剣崎遺跡（剣崎長瀬西遺跡）で後期の住居跡が多く検出され、東西1kmの八幡遺跡（19）において住居跡の他に、礫床墓や土坑墓が検出されている。

古墳時代 本遺跡周辺には、鉄製矛や横矧板銅留短甲を出土した若田大塚古墳（3）や楳ノ木古墳（4）、峯林古墳（5）があり、東には三角板革綴短甲や滑石製模造品を出土した剣崎長瀬西古墳（6）、方形墳や積石塚が確認された剣崎長瀬西遺跡の他、大島原遺跡など古墳が一定範囲で高密度に構築されている。また、八幡台地南辺には二子塚古墳（9）、平塚古墳（10）、国史跡八幡觀音塚古墳（11）があり、これらは比較的良好な状態で現存する。本遺跡に北接する若田坂上遺跡（今後報告予定）では円墳8基を検出しており、地形的には本遺跡と連続した斜面地上に構築された古墳群を確認している。また、剣崎長瀬西遺跡では、韓式系土器や装着された状態の轡が馬の歯と共に土坑から出土しており、渡来系要素の強い集団の居住域が想定されている。若田坂上遺跡でも中期～後期の住居跡が検出されている。

奈良・平安時代 本遺跡より南東0.6kmに所在する八幡中原遺跡3次・5次調査（16）や七五三引遺跡（17）において、版築による掘込地業が検出されている他、区画と考えられる大規模な溝が検出されており、これらの構造が規則的に配置されていることが明らかとなりつつある。また、八幡中原遺跡では円面鏡片、本遺跡南東1kmの八幡六枚遺跡（18）では肩部に「片岡郡」が刻書された須恵器甕片が出土しており、八幡中原遺跡を中心に当地に古代片岡郡に関連する官衙遺跡が想定される。



- 1. 若田金堀塚遺跡（本調査）
- 2. 若田坂上遺跡
- 3. 若田大塚古墳
- 4. 楳ノ木塚古墳
- 5. 峰林古墳
- 6. 剣崎長瀬西古墳
- 7. 大島原遺跡
- 8. 物見塚古墳
- 9. 二子塚古墳
- 10. 平塚古墳
- 11. 觀音塚古墳
- 12. 剑崎長瀬西遺跡
- 13. 若田原遺跡
- 14. 若田坂上遺跡
- 15. 八幡中原遺跡
- 16. 八幡六枚遺跡
- 17. 七五三引遺跡
- 18. 八幡六枚遺跡
- 19. 八幡遺跡
- 20. 剑崎稻荷塚古墳

第1図 若田金堀塚遺跡 周辺遺跡位置図

第3章 検出した遺構・遺物

第1節 調査の方法および調査成果の概要

今回の発掘調査対象面積は約1,000m²である。若田浄水場内にろ過砂置場の新設および道路建設の計画であり、計画地が場内の既存施設のない箇所であったため遺跡の残存が想定された。そのため、施設計画範囲内を対象とした。

発掘調査では、遺構確認面までは重機を使用した表土除去作業を行った。発掘調査中の掘削によつて生じた排出土は、調査区隣接の未使用地に仮置きして管理した。遺構確認面では人力により遺構平面プランの検出を行い、遺構の形状や重複関係の確認を行つた。遺構確認後は土層観察用ベルトの設定や半裁方向を決定し、順次人力での掘削を行つた。土層観察用ベルトは、各遺構の覆土堆積状況などを観察し、分層作業や写真撮影、断面図化作業を行つた後に取り除いた。

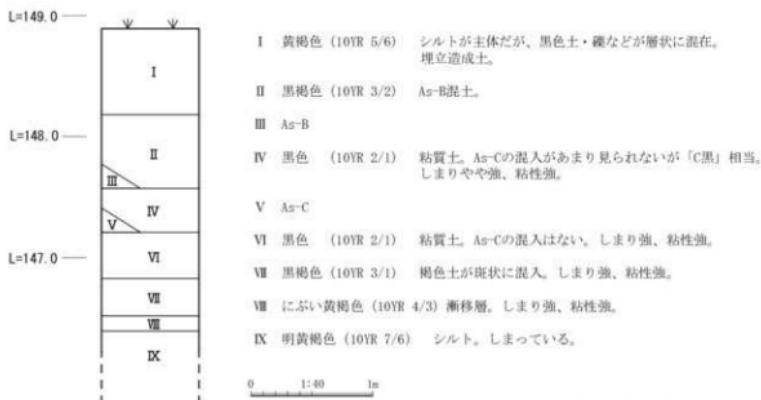
掘削が完了した遺構はフィルムカメラを用いて35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラにより記録写真撮影を行つた後、光波測距儀や平板測量で平面図および断面図ならびに遺物出土状況の記録図作成を行つた。検出した遺物は出土状況の記録写真や分布状況の記録図面を作成した後、遺構ごとに取り上げを行つた。すべての遺構の調査が完了した後に埋め戻しを行つた。

なお、円墳については、遺構の重要性を鑑みて現地での保存が期待された。水道局浄水課との調整を行い、一部盛土保存による対応が可能となつた。そのため本古墳については、石室や墳丘の構造解明のため断ち割りを一部実施したが、遺構の掘削は最小限に留めて現地保存を行つた。

今回の調査では、古墳時代終末期の円墳1基、近世期の道路状遺構を検出している。遺物は円墳の内外より一定量が出土している。以下では、遺構ごとに詳述する。

第2節 基本土層

I・IIは、地山の黄褐色シルト質土や黒色土のブロックが混在する造成土。調査区北東側を中心で大きく改変を受けて地山層まで掘削されている箇所もあったが、As-B一次堆積層（III）が一定範囲で残存している。IVはAs-Cを混入する黒色土層で、遺構確認面となる。層位的にVがAs-C層となるが、本調査区内の断面では明確な軽石層は確認していない。VIは黒色粘質土層であり、As-Cの混入がない。VII・VIIIが漸移層と考えられ、IXは基盤層と想定している明黄褐色シルト質土層となる。

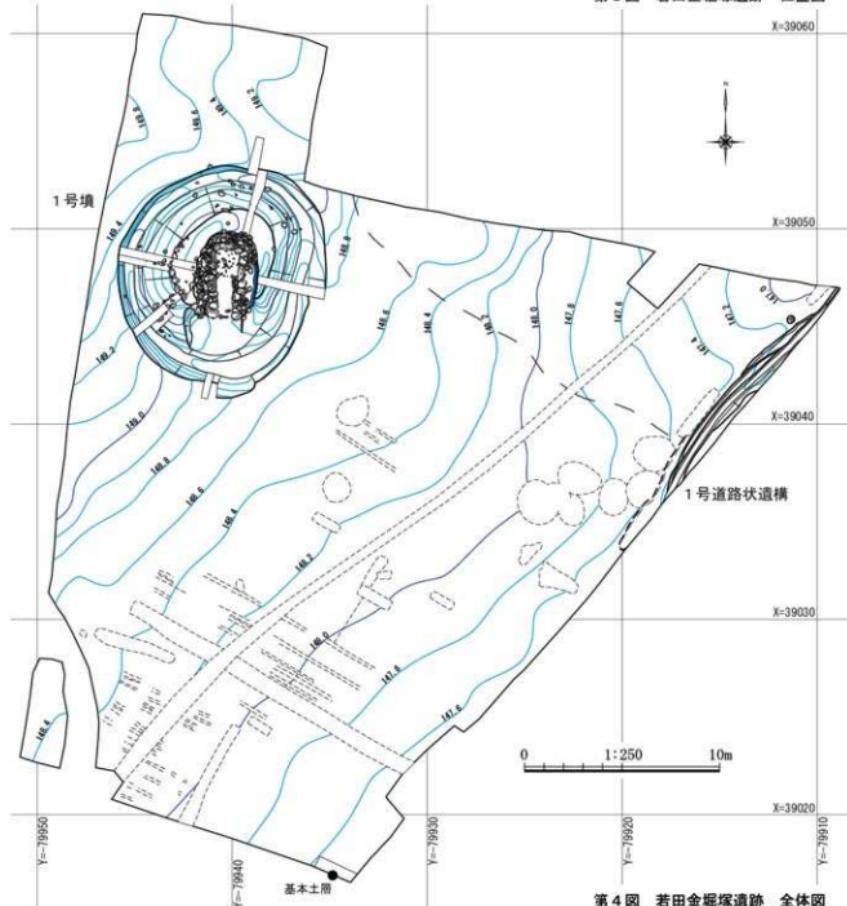


第2図 若田金堀塚遺跡 基本土層柱状図

若田金堀塚道路



第3図 若田金堀塚遺跡 位置図



第4図 若田金堀塚遺跡 全体図

第3節 検出した遺構・遺物

概要 今回の調査区では、地山の黄褐色シルト層まで削り込まれる地形改変が一部で見られ、調査区東側ではこれらシルトをブロック状に混在する土壤で造成されていた。にもかかわらず、古墳時代終末期円墳1基ならびに近世道路状遺構1条を検出することができた。

1. 円墳

(1) 調査前 調査前は樹木の生い茂る平坦地で、現地表面に古墳を想定させる遺構は現れていないかった。ただし、事業予定地の樹木の伐採に伴う抜根を行った際には、当遺構近辺で石室構築材と考えられる大型の礫やAs-Bの一次堆積層を確認している。また、表土の除去を行ったところ、As-Bに覆われた残存墳丘が認められた。As-Bの下から残存墳丘上の礫が一部露出をしており、葺石の残存が考えられた。墳丘の周囲にはAs-Bがほぼ円形に巡ったことから周塁の残存も想定された。

(2) 墳丘と周塁

墳丘 墳丘は円形だが、東側を大きく損なっており、検出形状は南北長8.4m、東西長7.4mの南北にやや長い楕円形となる。本来的には直径8m程度に復元されるものと推定される。また、墳丘上に巡る礫列から、墳丘上段は径5m程と推測される。

葺石 墳丘上には拳大から人頭大の礫が散見され、葺石が葺かれたものと想定されるが、原位置を保っていると考えられるものは少ない。墳丘上面の礫列は墳丘上段の葺石の根石と考えられるため、本墳は2段築成と想定される。

前庭 墳丘前面となる南では、石室開口部の西側の墳丘が一定のところで切れるため、前庭構造を想定した。しかし、石室西側の墳丘構築側面や前庭底部想定面には石積みや礫敷などの施設は認められず、遺構の形状から前庭構造を想定できるものの施設として残存していなかった。

周塁 周塁は全周する。周塁は墳丘西側で幅0.79mと最も狭く、北側0.88m、東側0.99m（推定）となり、石室前面では幅1.4mとなる。深さは概ね0.4~0.5mである。本墳は東へと下降する傾斜地に構築されているため、周塁底面のレベルは一定でない。覆土は黒色土を基調とし、上位にAs-B一次堆積層を確認することができる。

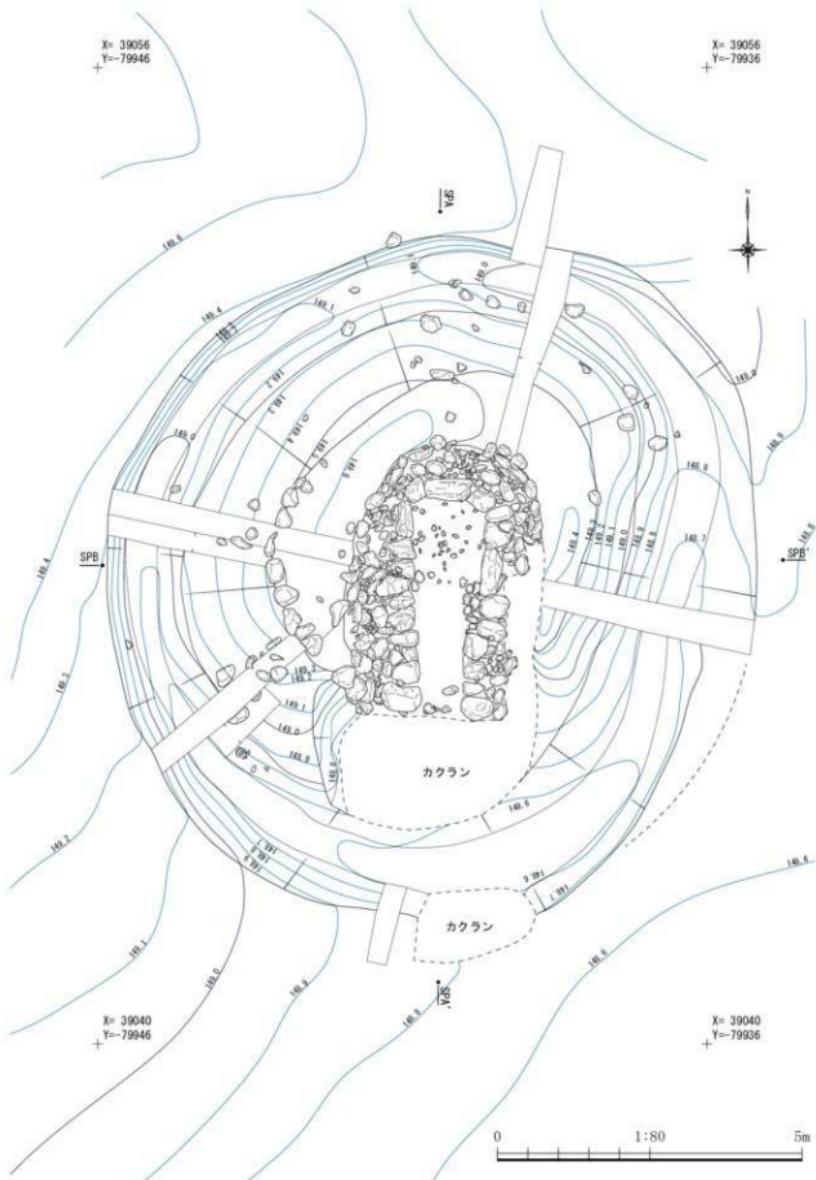
(3) 埋葬主体部

規模・形状 埋葬主体部は東側に袖を持つ片袖の横穴式石室である。天井石はすでになく、また東側壁の大半を欠失するが、奥壁1段および西側壁は2~3段が残存する。石室の全長は3.55m、玄室長2.20m、羨道長1.35mを測る。玄室幅は1.16m、羨道幅は0.72mである。残存高は0.78mほどである。

床面 床面は礫床が想定されたが調査時には残存しておらず、石室内的覆土を除去した時点で小礫が少量検出されたのみである。想定していた礫床の検出は困難であったが、一部に舗石の残存が認められた。特に東側壁の片袖部分の舗石が旧状を比較的良好に留めていた。

使用石材 石室に使用される石材は主に安山岩（輝石安山岩が主体）となる。いずれも人工的な加工は観察されず、壁体構成石材には比較的平坦面を持つ自然石を使用していることが看取される。

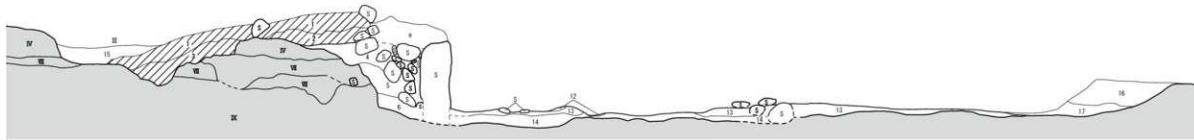
閉塞施設 羨道部分にて礫の検出はあったが、閉塞状態を留めているものとは考えられない。また、石室天井石や羨道東側壁石材などが欠失していることからも、後世の破壊により閉塞施設は失われたものと推定される。



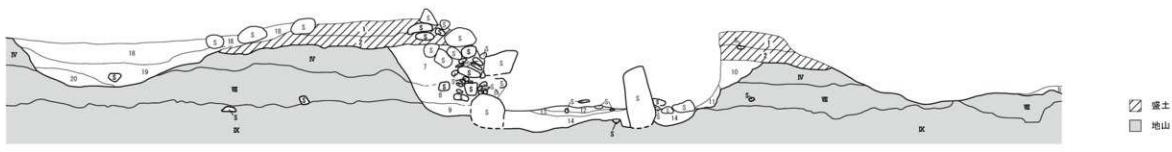
第5図 1号墳平面図

L=149.800

SPA

L=149.800
SPB

SPB'



0 1:40 2m

土層説明

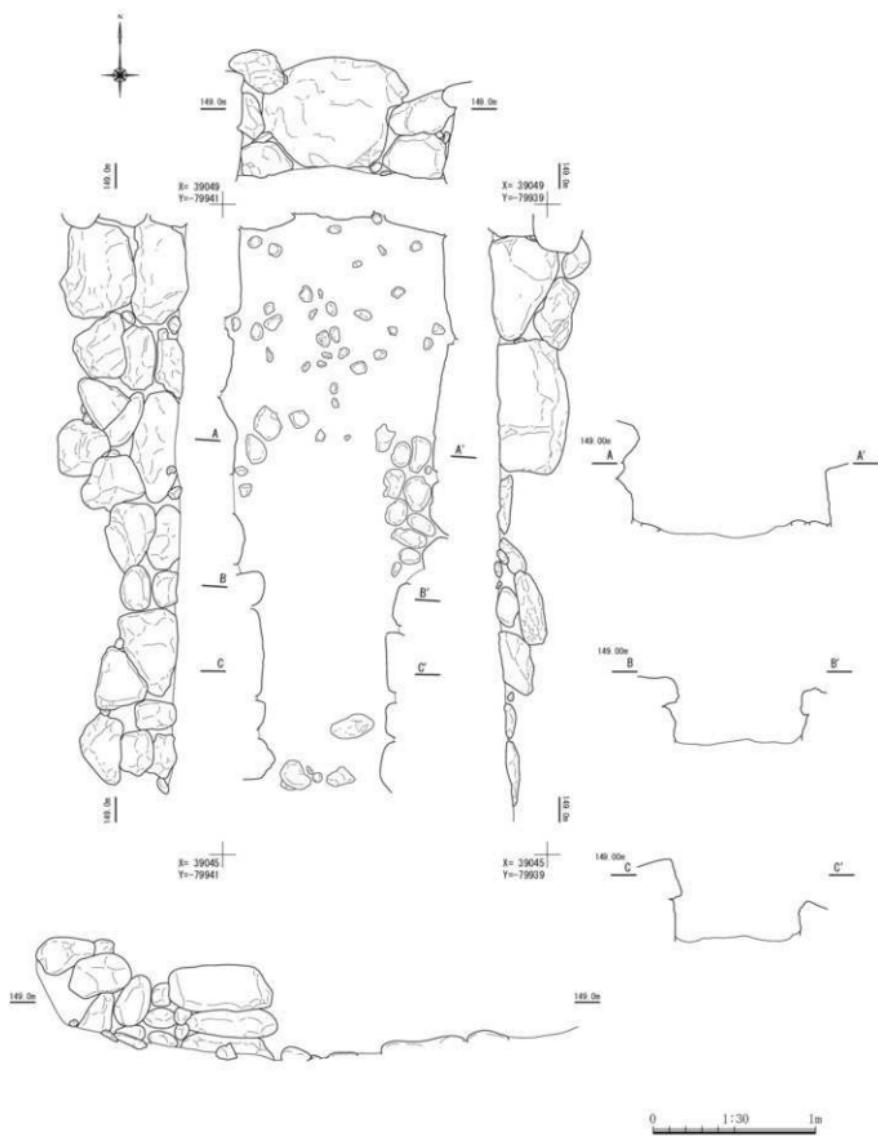
- 1 にじみ 黄褐色 (10YR 4/3) As-C, As-YP含む。黄褐色シルト (φ 2~2mm多、φ 1~2cm少)。しまり強、粘性やや弱。
- 2 暗褐色 (10YR 3/3) As-C混土層、黄褐色シルト (φ 3~5mm少、φ 3~7cmやや多)。しまりやや強、粘性やや弱。
- 3 黒褐色 (10YR 3/2) As-C混土層、黄褐色シルト (φ 3~5mm少)。しまり強、粘性弱。
- 4 黑褐色 (10YR 3/2) As-C混土層、黄褐色シルト (φ 2~3mmやや少、φ 2~3cm少)。しまりとても強、粘性やや強。
- 5 黑褐色 (10YR 2/2) 黄褐色シルト (φ 3~5mmやや少、φ 2~3cmやや多)。しまり強、粘性やや強。
- 6 黑褐色 (10YR 2/2) 黄褐色シルト (φ 2~3mmやや少)。しまりやや強、粘性強。
- 7 黑褐色 (10YR 2/2) 黄褐色シルト (φ 2~3mmやや少、φ 2~3cm少)。しまり強、粘性やや弱。
- 8 黑褐色 (10YR 2/2) 黄褐色シルト (φ 2~3mmやや少、φ 2~3cm少)。しまり強、粘性やや弱。
- 9 黑褐色 (10YR 2/2) 黄褐色シルト (φ 3~5mm少)。しまり強、粘性やや弱。
- 10 黑褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルト (φ 3~5mmやや少、φ 2~3cm少)。しまり強、粘性やや強。
- 11 黑褐色 (10YR 2/2) 黄褐色シルト (φ 2~3mm少)。しまりやや強、粘性やや強。
- 12 黑褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルト (φ 1~2mm少)。しまりやや弱、粘性やや弱。
- 13 暗褐色 (10YR 3/3) 黄褐色シルト (φ 2~3mmやや少)。しまり強、粘性やや弱。
- 14 黑褐色 (10YR 3/1) 黄褐色シルト (φ 1~2mm少)。しまりやや弱、粘性やや強。
- 15 黑褐色 (10YR 3/2) 黄褐色シルト (φ 2~3cmやや少)。しまり強、粘性強。
- 16 黑褐色 (10YR 3/2) As-C混土層 (少) しまりやや強、粘性やや弱。
- 17 黄褐色 (10YR 4/4) シルト
- 18 黑褐色 (10YR 3/1) As-C混土層 (やや多)。縦に少量含む。As-YPわずか。しまり強、粘性やや弱。
- 19 黑褐色 (10YR 3/2) As-C混土層 (少)。As-YP少量含む。しまり強、粘性やや弱。
- 20 黑褐色 (10YR 3/1) As-C混土層 (少)

基本土層 (地山)

- | | |
|--------------------|--|
| IV 黒褐色 (10YR 2/2) | As-C混土層。黄褐色シルト含まない。しまり強、粘性やや弱。基本土層IV層に相当する。 |
| VII 暗褐色 (10YR 3/3) | 黒褐色土混在。黄褐色シルト層移矯。しまり強、粘性やや強。基本土層VII層に相当する。 |
| VIII 黒色 (10YR 4/4) | 黒色土が全体的に混在する漸移層。しまりやや強、粘性やや強。基本土層VIII層に相当する。 |
| IX 黄褐色 (10YR 6/5) | シルト主体。しまりとても強、粘性弱。基本土層IX層に相当する。 |

- a As-B混土層。しまりとても弱、粘性弱。
b 黑褐色 (10YR 3/2) As-B混土層。しまりとても弱、粘性弱。

第6図 1号墳断面図



第7図 1号墳石室展開図

第1表 1号墳石室石材計測表

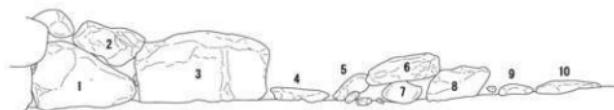
奥壁

番号	規模		石材	備考
	長さ	高さ		
1	21.9 cm	15.1 cm	安山岩	
2	10.9 cm	19.3 cm	安山岩	
3	33.1 cm	20.8 cm	安山岩	
4	75.9 cm	66.1 cm	安山岩	
5	34.7 cm	23.6 cm	安山岩	
6	35.7 cm	27.3 cm	安山岩	



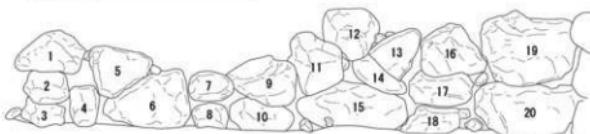
東側壁

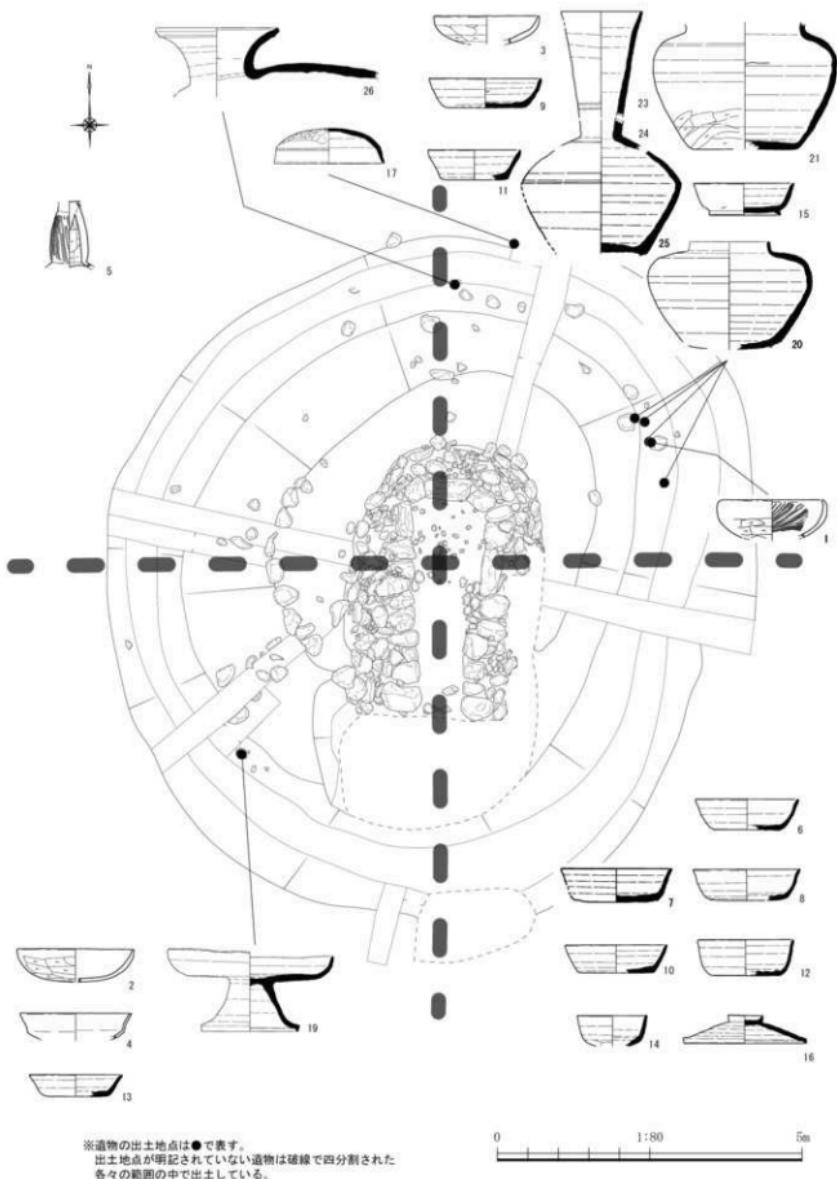
番号	規模		石材	備考
	長さ	高さ		
1	63.4 cm	40.2 cm	安山岩	
2	43.2 cm	22.6 cm	安山岩	
3	79.8 cm	36.6 cm	安山岩	
4	36.2 cm	6.6 cm	安山岩	
5	17.2 cm	14.9 cm	安山岩	
6	38.7 cm	15.3 cm	安山岩	
7	23.5 cm	13.1 cm	安山岩	
8	33.5 cm	15.9 cm	安山岩	
9	21.1 cm	5.6 cm	安山岩	
10	39.2 cm	5.7 cm	安山岩	南面：幅52.3cm×高4.5cm



西側壁

番号	規模		石材	備考
	長さ	高さ		
1	40.2 cm	20.2 cm	安山岩	南面：幅55.2cm×高25.7cm
2	26.6 cm	15.9 cm	安山岩	南面：幅53.9cm×高16.0cm
3	25.8 cm	12.7 cm	安山岩	南面：幅53.4cm×高10.2cm
4	16.2 cm	23.5 cm	安山岩	
5	34.2 cm	32.7 cm	安山岩	
6	52.5 cm	35.5 cm	安山岩	
7	27.3 cm	14.3 cm	安山岩	
8	22.0 cm	14.3 cm	安山岩	
9	38.7 cm	19.1 cm	安山岩	
10	26.6 cm	17.1 cm	安山岩	
11	22.5 cm	27.3 cm	安山岩	
12	19.4 cm	19.1 cm	安山岩	
13	28.7 cm	27.6 cm	安山岩	
14	32.6 cm	19.1 cm	安山岩	
15	60.6 cm	23.3 cm	安山岩	
16	38.3 cm	23.2 cm	安山岩	
17	37.5 cm	18.0 cm	安山岩	
18	35.3 cm	13.1 cm	安山岩	
19	57.9 cm	30.9 cm	安山岩	
20	61.7 cm	28.3 cm	安山岩	





※遺物の出土地点は●で表す。
出土地点が明記されていない遺物は破線で四分割された
各々の範囲の中で出土している。

第8図 1号填出土遺物分布状況図

裏込め 石室壁体の外縁には幅0.5~0.6mで裏込めが設けられている。石室は地山層を削り込んで構築されており、検出した地山上面から石室掘り方（石材設置面）まではおよそ0.9mとなる。この地山層の掘り込み壁面に対して、人頭大以上の比較的大型の輝石安山岩自然石を積み上げるように石室壁体の裏に充填している。

(4) 出土遺物

石室は天井石および東側壁の南半分を欠失しており、石室内にはAs-Bが高い比率で混入する流入土が存在していた。礫床も大部分が失われており、副葬品等遺物の出土はなかった。また、墳丘は東側から南側にかけて大きく失われており、特に搅乱を受けた南東側で裏込め礫が多量に廃棄されていた。その搅乱された範囲からは比較的多くの遺物が出土している。

本調査区では、本墳以外に古墳は確認していない。そのため、これら遺物が原位置を留めていないものの、1号墳に伴うものであった蓋然性が高いものと思われる。ただし、出土位置が特定できないものが多いため、本墳に伴ったものか流入したものかの厳密な判断は困難である。

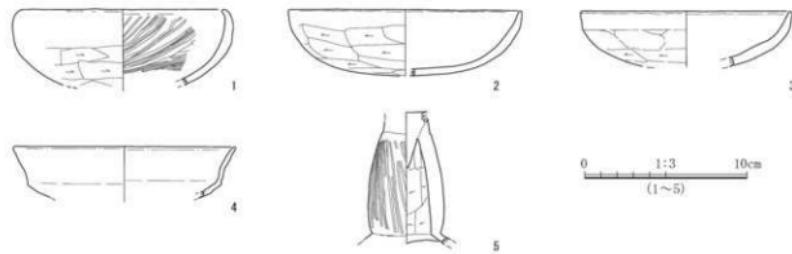
第9図1~5は土器器である。1は口縁がやや内溝し、内部に暗文ミガキをもつ。2・3は口縁部分をナデ、以下体部にケズリを施している壺である。4の壺は体部から口縁にかけて強く外反する。5の高壺脚部は外面を暗文状に磨く。

第10図6~15は須恵器壺類で、口径は概ね11~13cm、器高は4cm内外となる。底部は回転ヘラ切りである。7は削り出し高台が付き、15は貼り付け高台となる。16~18は須恵器蓋である。16は内面にカエリがあり、環状ツマミを持つ。17は蓋壺の蓋で、自然軸が多く付着する。18は短頭壺の蓋であろう。墳丘前面よりの出土である。出土位置はやや離れているが20および21のいずれかに伴った可能性が考えられる。19は高盤である。壺部は丸く立ち上がり、脚部は八の字に広がる。

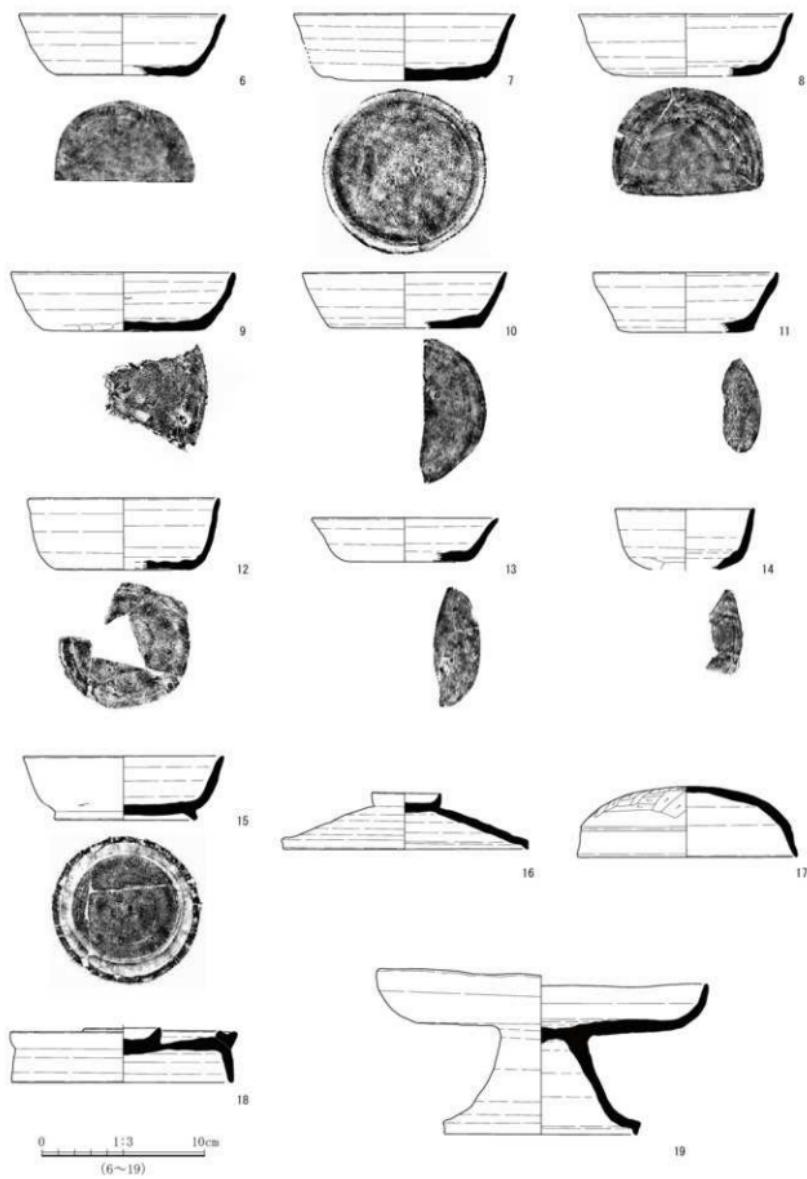
第11図20~21は短頭壺で、20は欠落しているが台が付く。22は壺だろうか。外面に自然軸や窓体が付着する。23~25は長頭壺で、破片同士の直接の接合点がないが、胎土の様相や外面に付着する自然軸の様子などからすべて同一個体と考えられる。26は平瓶である。頭部を中心に沈線5条が同心円状に施される。

第12図27~28は須恵器大甕で、接合しないが、それぞれの資料の様相から同一個体と考えられる。

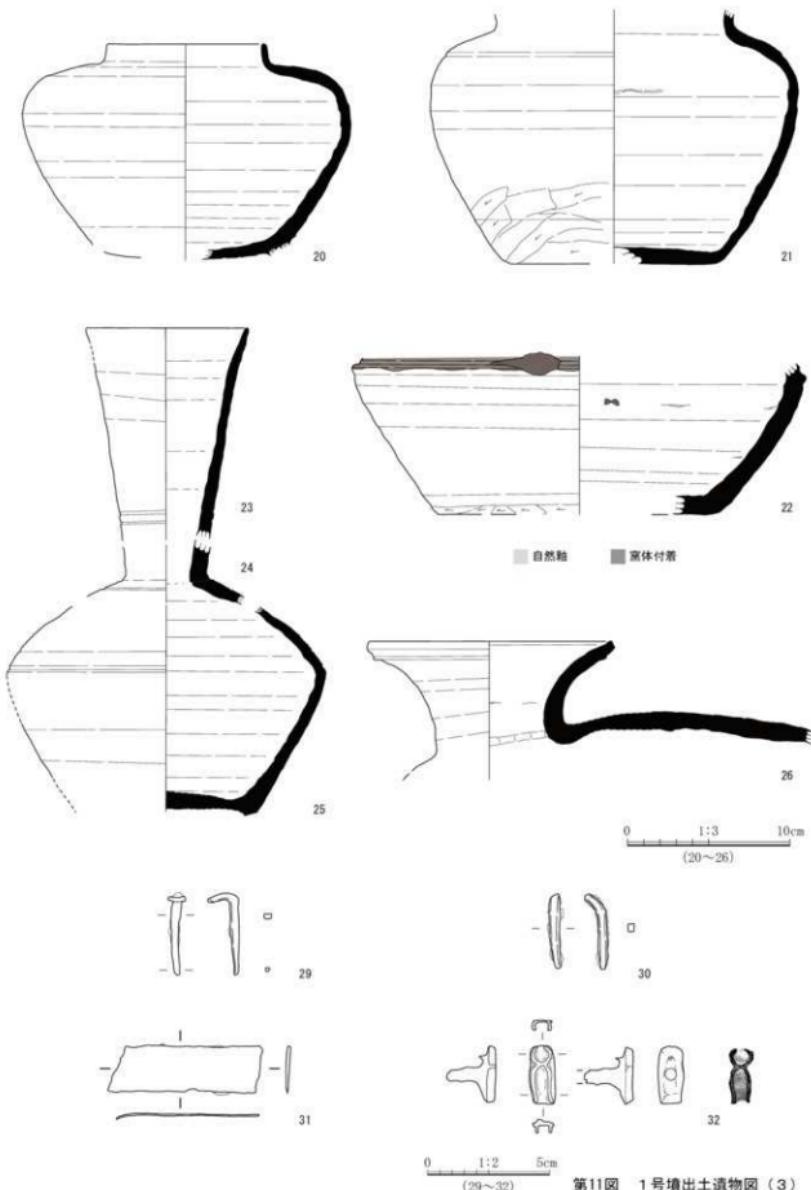
第11図29~32は金属製品である。いずれも墳丘の南面で検出している。29・30は鉄製釘と考えられる。表面は腐食が進行しているが断面形状も認識することができる。本墳の埋葬主体部に木棺が伴った可能性を考慮したい。31は薄い鉄製の金属板で、両側の端部が欠失している。鎌や刀剣の可能性を想定するが明確ではない。32は銅製の印章と考えられる。形状や用途などから焼印と想定するが、既存の古代焼印と比較すると、材質や規模に著しい差が認められる。本資料と1号墳との関連は定かではなく、また古代焼印との類似性の乏しさから、現況では古代以降の遺物である可能性を考えたい。



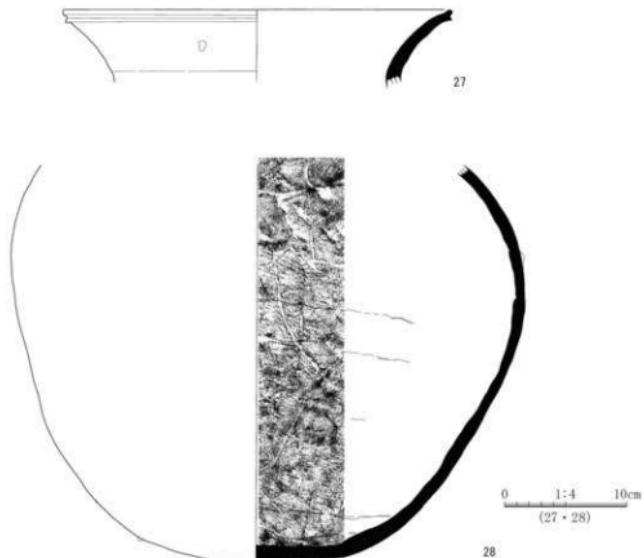
第9図 1号墳出土遺物図(1)



第10図 1号墳出土遺物図（2）



第11図 1号墳出土遺物図 (3)



第12図 1号填出土遺物図(4)

第2表 1号填出土遺物観察表・土器(1)

図版	出土地	番号	種別 器種	法量(cm)			成形・整形技法等の特徴 (器形・文様の特徴)	①焼成 ②色調 ③胎土	残存	備考
				口径	底径	器高				
第9図 PL_6	埴丘北東	1	土師器 环	【12.6】	—	(4.6)	内: 口唇はナデ、底面～体部にかけて 丁寧な精文を施す 外: 口唇はナデ、体部ヘラケズリ	①良好 ②5YR 6/6 ③長石、砂粒子	口縁～体部 破片	
第9図 PL_6	埴丘南西	2	土師器 环	【14.4】	—	(4.1)	内: ナデ 外: 口唇はナデ、以下体部ヘラケズリ	①良好 ②2.5YR 6/6 ③小石粒	口縁～体部 1/2	
第9図 PL_6	埴丘北東	3	土師器 环	【13.0】	—	(3.4)	内: ナデ 外: 口唇はナデ、以下体部粗雑なケズリ	①良好 ②7.5YR 6/4 ③小石砂	口縁～体部 1/4	
第9図 PL_6	周堀南西	4	土師器 环	【13.7】	—	(3.2)	器面の摩擦が著しいため詳細不明	①良好 ②5YR 7/8 ③小石粒	口縁～体部 1/4	
第9図 PL_6	埴丘北西	5	土師器 高环	—	—	(8.2)	内: 横位にヘラナデ。横が残存する 外: 縦位に暗文ミガキ	①良好 ②7.5YR 6/8 ③長石、小石粒	脚部 2/3	
第9図 PL_6	周堀南東	6	須恵器 环	【12.6】	【8.2】	3.8	口クロ回転右	①良好 ②5YR 8/2 ③小石粒	口縁～体部 1/3	
第9図 PL_6	埴丘南東	7	須恵器 环	【13.4】	10.4	4.1	口クロ回転右。底部削り出し高台	①良好 ②7.5YR 7/1 ③小石粒	口縁～底部 1/2	
第9図 PL_6	周堀南東	8	須恵器 环	【13.2】	【9.2】	3.8	口クロ回転右。口唇が僅かに反る	①良好 ②5YR 8/2 ③黒色粒子	口縁～底部 1/3	
第9図 PL_6	周堀北東	9	須恵器 环	【13.8】	【10.0】	3.6	口クロ回転右。外面底部付近ケズリ。 やや粗雑なつくり	①良好 ②7.5YR 7/1 ③小石粒、砂粒子	口縁～底部 1/5	
第9図 PL_6	埴丘南東	10	須恵器 环	【12.6】	【9.2】	3.4	口クロ回転右	①良好 ②5YR 4/1 ③白色粒子	口縁～底部 1/3	
第9図 PL_6	埴丘北東	11	須恵器 环	【11.2】	【8.4】	3.7	口クロ回転右。底部ヘラ切り後整形か。 外面一部赤変色	①良好 ②5YR 5/0 ③白色粒子	口縁～底部 1/4	
第9図 PL_6	周堀南東	12	須恵器 环	【11.8】	8.2	4.4	口クロ回転右。外面一部に黒変色	①良好 ②7.5YR 8/1 ③小石粒	口縁～底部 2/3	

第3表 1号墳出土遺物観察表・土器(2)

図版	出土地	番号	種別 器種	法量(cm)			成形・整形技法等の特徴 (器形・文様の特徴)	①焼成 ②色調 ③胎土	残存	備考
				口径	底径	器高				
第10回 PL.7	埴丘南西	13	須恵器 壺	【11.4】	【7.4】	2.7	口クロ回転右	①やや酸化炎 ②2.5Y 5/1 ③白色粒子	口縁～底部 1/3	
第10回 PL.7	周囲南東	14	須恵器 壺	【8.6】	【7.0】	3.7	口クロ回転右。外面に赤色付着物あり	①良好 ②N 7/0 ③砂粒子	口縁～底部 1/5	
第10回 PL.7	埴丘北東	15	須恵器 壺	【12.4】	8.6	3.9	口クロ回転右。底部粘土貼り付けによる高台	①良好 ②2.5Y 7/1 ③黒色粒子	口縁～底部 1/3	
第10回 PL.7	周囲南東	16	須恵器 壺	15.1	ツマミ 4.2	3.5	壺状フマミ。カエリがつく	①良好 ②5Y 8/1 ③白色粒子	ほぼ完形	
第10回 PL.7	周囲北東	17	須恵器 壺	13.5	—	4.5	体部中程で沈線1条を巡らせ、端部はやや外に開く。内部は自然釉が多量に付着。	①良好 ②N 7/0 ③砂粒子	4/5	
第10回 PL.7	1号墳	18	須恵器 壺	13.7	—	3.4	粘土貼り付けによりやや張り出す肩部をつくり、沈線1条を施す。 頂部はややこがり壺状フマミをつける。 裾部は直立気味に僅かに開く。	①良好 ②7.5Y 6/1 ③黒色・白色粒子	ほぼ完形	
第10回 PL.8	周囲南西	19	須恵器 高盤	20.5	12.0	10.2	盤：整形右側脚 脚：握端部に強い棱をもつ。盤との接合部内面の腰状突起付近に灰白色に変色する滑らかな範囲あり。	①良好 ②2.5Y 7/1 ③白色粒子	ほぼ完形	
第11回 PL.8	埴丘北東	20	須恵器 短頸壺	9.8	12.2	13.2	整形左回転右。最大径は肩部20.2cm。高台を欠くが、剥離底から粘土貼り付けと考される。	①良好 ②N 7/0 ③小石、黒色粒子	ほぼ完形	
第11回 PL.8	埴丘北東	21	須恵器 短頸壺	—	(15.5)	12.6	ロクロ回転右。肩部に浅い沈線が1条ある。やや粗雑なつくり。	①良好 ②7.5Y 8/1 ③小石粒	口縁～底部 1/3	
第11回 PL.8	埴丘北東	22	須恵器 雙耳	—	17.5	(9.3)	外面(ヒビナグ)、内面へラナダ。 最大径は肩部27.9cm。肩部より口縁に向かって急激に内に向す。	①良好 ②N 5/0 ③小石粒、白色粒子	肩部～底部 2/3	
第11回 PL.8	埴丘北東	23	須恵器 長頸壺	10.0	—	(12.9)	整形右回転。頸部付近に2条の沈線あり。外面に刀子状の工具による刺突痕あり。	①良好	口縁～底部 4/5	直接の接合点がないが、同一個体と考えられる
第11回 PL.8	埴丘北東	24	須恵器 長頸壺	—	5.4	(3.9)	頸部下に沈線1条あり。	②5Y 6/2 ③白色・褐色粒子、全体に精緻		
第11回 PL.8	埴丘北東	25	須恵器 長頸壺	—	【11.4】	(12.5)	最大径は肩部で19.6cm。肩部直上に沈線2条がある。肩部～頸部間はハケ状工具で整形。	①良好 ②N 5/0 ③小石粒、白色粒子		
第11回 PL.9	周囲北西	26	須恵器 平盤	15.2	—	—	肩部：口縁直下に隆起線1条。胴接続部内面に指痕。胴部：比較的円心状に4条。工具の当方によるもののか沈線が多量になる箇所あり。胴部124.7cm以上となる。	①良好 ②N 5/0 ③小石粒、白色粒子	口縁～胴部 1/3	
第12回 PL.9	1号墳	27	須恵器 大甕	【32.0】	—	(6.6)	口唇部に沈線あり。自然釉付着。	①良好 ②7.5Y 6/1 ③白色粒子	口縁 1/3	同一個体 か。
第12回 PL.9	1号墳	28	須恵器 大甕	—	11.9	(32.3)	外面タクタイ。内面で具痕が認められるが、内外面ともナダ消している。最大径は推定41.8cm。肩部に自然釉付着。	①良好 ②7.5Y 6/1 ③白色粒子	肩部～底部 1/2	

第4表 1号墳出土遺物観察表・金属製品

図版	出土地	番号	種別 器種	材質	法量(cm)			重さ(g)	観察所見	備考
					長さ	幅	厚さ			
第11回 PL.10	埴丘南東	29	釘	鉄	33.5	4.5	4.0	1.95	先端が屈曲し、L字状を呈する。断面四角。先端部分がやや扁平に広がる。	
第11回 PL.10	埴丘南西	30	釘	鉄	32.0	4.5	6.0	1.89	先端が緩く屈曲し、L字状を呈する。断面四角。	
第11回 PL.10	埴丘南西	31	不明	鉄	58.5	20.0	2.5	7.45	両端は欠失している。一端で僅かに湾曲する。	
第11回 PL.10	埴丘南西	32	印鑑か	銅	24.5	12.0	4.5	8.45	裏面：「やっとこ」を思わせる意匠がある。 背面：欠損するが柄と考えられる棒状部位と、先端が尖った円錐状突起がある。	

2. 道路状遺構

概要 調査区北東隅で検出した遺構で、遺構確認当初は溝と考えていた。

検出面において高い密度のAs-Aが確認され、遺構は天明三（1783）年の浅間山噴火時に埋没したと考えられる。調査の結果、覆土の色味や質の差異、底部の硬化面、遺構の形状や重複関係より、本遺構が複数期にわたる道路状遺構（a～c）であることが想定された。

規模 いずれも調査区外に延びているため全容は明らかにし難いが、遺構規模はそれぞれ、

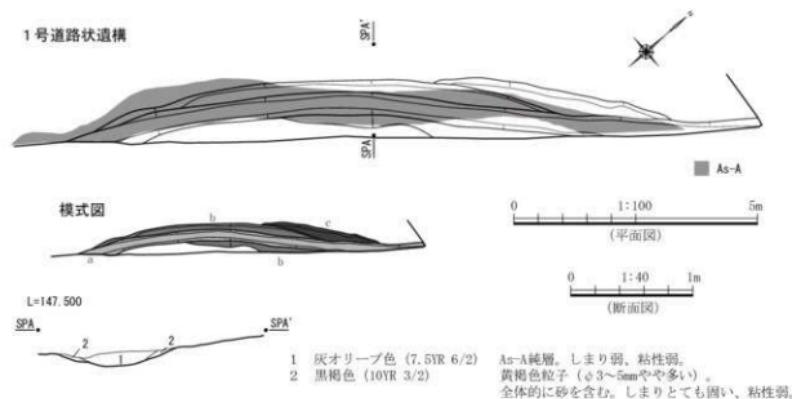
a：長11.4m×幅0.4m、b：長8.8m×幅0.9m、c：長4.6m×幅0.4mである。また、いずれも遺構も確認面からの深さは10cm内外であった。

底面 aの底面には親指大の礫が密集し、下面の土層に半ば押し込まれるように極めて硬質な面を形成していた。この礫層は比較的近似した粒径の小礫により構成されていた。遺構周囲の地山等に同等の密度で含まれるものではなく、水が流れたような痕跡は確認できないため自然に流入したものとは想定し難い。したがって、これら礫層は遺構面に意図的に敷かれたものと解釈している。b、cについても、局所的に礫の残存が見られ、a同様に小礫が敷かれていた可能性が考えられる。

重複 覆土や遺構の重複からみて、遺構の新旧はc→b→aの順で新しくなる。

時期 a～cのいずれも形状や敷設礫層などの構造が類似するため、本遺構は比較的近接した時間幅の中で構築・機能と廃絶を繰り返したものと考えられる。3段階では最も古くなるcの構築は不確かだが、最終段階となるaは純度の高いAs-Aにほぼ直接埋没しているため、本遺構は天明三年には機能を停止したものと思われる。

1号道路状遺構

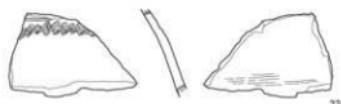


第13図 1号道路状遺構平面図・断面図

3. 遺構外出土遺物

遺構に伴わないが調査中に出土した遺物が少量あった。

第13図33は弥生後期土器で、甕の頭部であろう。34は須恵器甕で、35は高台付甕である。



33
34
35

0 1:3 10cm
(33~35)

第14図 遺構外出土遺物図

第5表 造構外出土遺物観察表

図版	出土地	番号	種別 器種	法量(cm)			成形・整形技法等の特徴 (器形・文様の特徴)	①焼成 ②色調 ③胎土	残存	備考
				口径	底径	器高				
第14回 PL_10	造構外	33	弥生土器 壺	—	—	—	横位の簾状文と波状文が施される。 内外面ミガキ。構式土器。	①良好 ②N 5/0 ③砂粒子	破片	
第14回 PL_10	造構外	34	須恵器 壺	—	—	(3.5)	横巻状工具を連続して刺突し施文。	①良好 ②N 5/0 ③精緻、白色粒子	破片	
第14回 PL_10	造構外	35	須恵器 高台付壺	【13.6】	【8.2】	6.5	貼付け高台。口縁外部がやや黒変色。	①良好 ②BY 7/1 ③白色粒子	破片	

4. 小結

今回の調査では、古墳時代円墳1基および近世道路状造構を検出した。以下では検出した各造構について所見をまとめたい。

(1) 1号墳について

1号墳は、径8m程度に復元することができる小円墳で、墳丘の至る箇所に搅乱を受けながらも旧状を窺い知ることができる残存状況であった。本墳の特徴を整理すると、①径8m強の円墳、②2段以上の段築で1段目は地山削り出し、③葺石はあるが、④埴輪を樹立しない、⑤墳丘を全周する周堀、⑥東側壁に袖部をもつ片袖の横穴式石室で安山岩系石材の自然石乱石積み、⑦詳細は不明だが前庭を持つという点が抽出される。

墳丘径については、墳丘東側が大きく損なわれているため比較的残存が良好だった西側墳丘を手がかりに図上復元をすると、本来の墳丘は径8.5mほどであったと想定できる。残存墳丘の上位に一部盛土が確認されたが、墳丘断ち割りの結果、1段目は地山削り出しによることが判明した。したがって、埋葬主体部の掘り方は地山を掘り込んで構築されており、その深さは奥壁1段目(側壁だと2~3段)の高さまでとなる。壁体と掘り方の間には比較的大型の礫を多用して裏込めを設けている。石室は東側壁南半の大半を欠くが、残存していた最下段の礫や舗石の位置から東側壁に袖を設ける片袖の平面プランが確認できた。周辺の古墳群では片袖石室は特徴的と言えよう。羨道と玄室の長さ比はおよそ1:2となる。ここでは企画論には立ち入らないが、残存墳丘や周堀から想定する設計上の墳丘規格、墳丘と石室や裏込めの関係など、極めて高い規格性で設計されていることが看取される。

前庭について、石室前面西側で墳丘が途切れる箇所が翼部に相当すると考えられるが、礫積み等は検出できなかった。対称となる墳丘南東側は搅乱のため大きく欠失しているため、やはり造構として前庭構造を確認することができなかった。これらのことから、礫積みや礫敷を持たない素掘りの前庭の存在を想定するに留めたい。

遺物は出土位置が不確かなものが多く、原位置を保つであろうものは皆無であった。出土遺物は、口縁が内湾する壺などの5世紀後半、平底の須恵器壺や長頸壺、高盤など7世紀後半、短頸壺など7世紀末から8世紀前半の大きく3つのグループに分かれることが考えられる。石室のあり方等から5世紀段階のものは流入遺物と考えられるため、7世紀後半の遺物群が本墳の構造に伴うものであり、7世紀末~8世紀の遺物群は追葬や墓前祭等の二次的行為に伴うものと考えられる。

したがって本墳の築造年代は、石室形状や出土遺物から古墳時代終末期となる7世紀後半におきたい。

(2) 道路状造構について

1号道路状造構は、造構の重複関係などから複数時期の使用が想定され、重複の最も新しい造構が高い純度のAs-A軽石により埋没していることから、本造構機能時期の下限を近世後半に求めることができる。道路状造構の使用開始時期が不明のため存続期間は判然としないが、一定期間の継続的な利用が想定される。

写 真 図 版



若田金堀跡 調査区全貌 (上が北東)



1号墳 掘出状況（→西）



1号墳 莊石堆出状況（→南西）



1号墳 大型礫堆出状況（→西）



1号墳 調査風景（→西）



1号墳 墓葬主体部調査状況（→南）



1号墳 埋葬主体部床面核出状況（→南）



1号墳 圓錐出土遺物（→南）



1号墳 埋葬主体部床面核出状況（→南）



1号墳 石室完掘状況（一南）



1号墳 石室裏込め検出状況（一北）



1号墳 石室底面検出状況（一東）



1号墳 石室西南門検出状況（一西）



1号墳 完掘状況（一南）



石室西側壁（オルソ画像）



石室東側壁（オルソ画像）



石室奥壁（オルソ画像）



石室南面（オルソ画像）

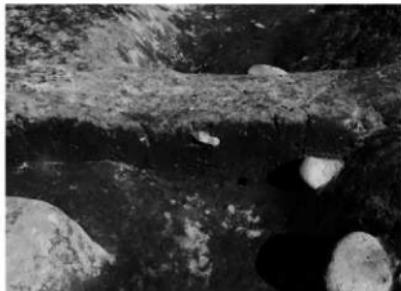
0 1:10 1m



北→

0 1:20 1m
(オルソ画像)

石室床面様出状況



1号墳 墓室西土層断面（→南）



1号墳 墓丘断ち割り状況 東トレンチ（→北）



1号墳 墓丘断ち割り状況 北トレンチ（→西）



1号墳 奥壁突出状況（→東）



1号墳 西側壁奥門突出状況（→東）



1号墳 東側壁袖部突出状況（→西）



1号墳 砖石突出状況（→東）



1号墳 奥壁裏込め断ち割り状況（→西）



1号墳 石室掘り方突出状況（→北）



1号墳 石室内断ち割り状況（→東）



1号墳 石室断ち割り状況（→南）



1号境 山砂による侵食状況（→西）



1号境 調査風景（→東）



1号道路状況 深度状況（→北）



1号道路状況 深度被覆き接出状況（→西）



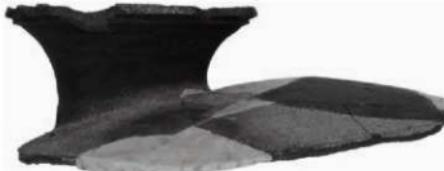
1号道路状況 土層断面（→北）



免査調査完了状況（→北西）



1号墳出土遺物（1）



1号填出土遗物（2）



27



28

1号墳出土遺物（3）



29



30



31



32

1号墳出土遺物（4）
金属製品



33



34



35

遺構外出土遺物

あいう

報告書抄録

ふりがな	わかつかなほりづかしいせき						
書名	若田金堀塚遺跡						
副書名	若田浄水場ろ過砂置場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 387 集						
編著者名	山本 ジェームズ						
編集機関	高崎市教育委員会						
所在地	群馬県高崎市高松町35番地1						
発行年月日	平成29年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
わかつかなほりづかしいせき 若田金堀塚遺跡	ぐんまけんたかさきしわかつまち 群馬県高崎市若田町 291-1 (若田浄水場内)	102024	660	36° 20' 54"	138° 56' 34" 2015.10.05 ~ 2016.03.25	1,000m ²	ろ過 砂置場 整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
若田金堀塚遺跡	墳墓	古墳時代	円墳		須恵器、金属製品		
		近世	道路状遺構				

高崎市文化財調査報告書 第387集

若田金堀塚遺跡

—若田浄水場ろ過砂置場整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行日 平成29年3月31日
編集・発行 高崎市教育委員会
群馬県高崎市高松町35番地1

印刷 株式会社精真社